

## 研究論文 (Articles)

## 社会的予測における人物情報と状況情報の機能的同異

織 田 涼・八 木 保 樹

(立命館大学大学院文学研究科・立命館大学文学部)

## The Functional Similarities and Differences between the Person Information and the Situational Information for the Social Prediction.

ORITA Ryo and YAGI Yasuki

(Graduate School of Letters, Ritsumeikan University, College of Letters, Ritsumeikan University)

This study focused on the information gathering stage for the social prediction, and investigated the functional similarities and differences between the person information (other's attitude) and the situational information (situational forces). In two experiments, these two types of information implied alternative behaviors of the other, and there were five pieces of information per one type. Participants gathered them in an arbitrary manner (Experiment 1) or in a preliminarily designed manner (Experiment 2). Simultaneously, they predicted the other's behavior in each gathering trials. In Experiment 1, participants showed a biased gathering toward the person information. Meanwhile, in analyses of the gathering manner and the changing direction of predictions, two types of information exhibited the similar patterns (Experiment 1 and 2). An increase in the amount of the one type of information intensified the prediction of the behavior the information implying. Additionally, a high degree of continuous gathering of the same information reduced the prediction of another behavior. These patterns indicated that the person and the situational information shared similar functional natures at the information gathering stage for the social prediction.

**Key Words** : prediction of other's behavior, person versus situation, information gathering.

キーワード : 他者の行動の予測, 人物 対 状況, 情報収集

人は他者との相互作用を円滑に行うために、他者がどのように行動するかを予測し、予測した行動に基づいて適切な自己の反応を決定する。この他者を対象とした行動の予測を社会的予測 (social prediction) と呼ぶ (Dunning, Grffin, Milojkobic & Ross, 1990)。社会的予測には 2 種類の情報が利用される (Ross &

Nisbett, 1991)。ひとつは予測の対象となる人物の性格特性や行動傾性、態度や能力の情報であり、ここでは人物情報 (person information) と呼ぶ。ふたつめは予測する状況において生じる行動への圧力や、一般的に多くの人が取る行動に関する情報であり、状況情報 (situational information) と呼ぶ。

社会的予測を扱う多くの研究は、2種類の情報が異なる行動を排他的に示唆する“人物 対 状況” (person versus situation) という場面に焦点を当ててきた (Newman, 1996)。この場面において、人は状況情報よりも人物情報に過度に依存する傾向を示し、この傾向は傾性主義バイアス (dispositionist bias) と呼ばれる (Ross & Nisbett, 1991)。傾性主義バイアスを検討した研究は、人物情報と状況情報の利用過程に着目してきた。そして、2種類の情報の性質や役割の違いを指摘している。性質の違いとして、人物情報の利用は認知資源をそれほど必要としないのに対して、状況情報の利用は多くの認知資源と強い動機付けを要する (Trope, 1986)。また役割の違いとして、人物情報が示唆する内容は判断の係留点 (anchor) とされるが、状況情報は割引原理に即した係留点からの調整 (adjustment) に利用される (Dunning et al., 1990)。社会的予測の傾性主義バイアスは、調整の役割を担う状況情報の利用に必要な資源や動機付けの不十分さから、人物情報が過度に重み付けられた結果とされる (Newman, 1996; Poon & Koehler, 2006)。

その一方で、他者に関する推論の研究において、人物情報と状況情報の同異を見直す知見が得られている。Krull (1993) は、参加者に2種類の課題目標のひとつを与えた上で、他者の行動記述を呈示した。他者の性格特性を推論する目標を与えられた参加者は、他者の内的属性が行動に及ぼす寄与を非努力的に推論し、周囲の状況が行動に及ぼす寄与を努力的に推論した。他方で、他者が置かれた状況を推論する目標を与えられた参加者は、状況の寄与の推論を非努力的に行い、他者の内的属性の寄与を努力的に推論した。特性推論の目標は人物情報の処理を促し、状況推論の目標は状況情報の処理を促すと推察される。つまり、行動の規定因の推論において、人物情報と状況情報の利用に要す

る資源の多寡は、課題目標がいずれの情報の処理を促すのかに依存すると考えられる。

同様の知見は、他者の行動記述の記憶課題を用いたHam & Vonk (2003) の実験からも得られている。記憶教示下で行動記述を呈示すると、行動が含意する人格特性 (人物情報) の単語が記述内に含まれていたと誤再認された。この誤再認は、行動記述から人格特性が無意図的および無意識的に推論されたことを意味する (Winter & Uleman, 1984)。しかしこの実験では、同一の行動記述において、状況の特徴 (状況情報) を表す単語の誤再認も認められた。つまり、記憶教示下においては、状況情報の推論も同様に、無意図的および無意識的に生じる、動機付けを必要としない認知過程であると言える。Krull (1993) やHam & Vonk (2003) の知見は、他者の推論の過程では、人物情報と状況情報の利用に必要な認知資源や動機付けに差異が無いことを示唆している。

また、Reeder, Kumar, Hesson-McInnis & Trafimow (2002) は、他者の行動の背後にある動機の推論においては、他者の特定の行動 (人物情報) を動機づけた外的要因 (状況情報) の推論が求められるため、2種類の情報の意味内容が単純に統合されると主張した。この意味内容の統合過程では、2種類の情報に係留や調整という役割の違いが生じない。したがって、動機の推論においては、人物情報と状況情報が固有の役割を持つわけではない。

これらの知見は、人物情報と状況情報が、利用に要する資源の多寡や動機付けの有無などの性質、および係留や調整といった役割において、違いを持たないことを示唆している。しかし、これらの示唆は、他者の動機や人格特性の推論の研究で得られたものである。動機や特性は抽象度の高い構成概念であり、具体的な過去の行動と実際の状況から帰納的に推論される。一方で社会的予測は、推論された特性および態度、

将来の状況で生じると推測される圧力といった、より抽象的な概念から、将来の具体的な行動を予測する演繹的な過程であり、動機や特性の推論とは区別される（Maass, Cadinu, Taroni & Masserini, 2006）。したがって、人物情報と状況情報の性質および役割の同異について、動機や特性の推論に関する研究から示唆が得られるものの、それとは別に、社会的予測を対象とした検討が必要である（Newman, 1996）。

社会的予測の特徴は、人物情報と状況情報の統合が求められる点にある。態度や特性という抽象的な概念には、複数の行動が関連を持つ。したがって、態度や特性のみから特定の行動だけを予測し得ない（Maass et al., 2006）。特定の行動を予測するためには、将来の状況において人が取りえる行動も同時に考慮する必要がある。この場面では、特定の情報への処理を促す課題目標がない。そのため、2種類の情報の利用に必要な資源および動機付けの多寡に差異が無いと考えられる。また、2種類の情報の統合過程であることから、“人物情報＝係留”および“状況情報＝調整”という役割の固有性も無いだろう。つまり、社会的予測においても、2種類の情報の利用における性質や役割に差異がないと考えられる。

人物情報と状況情報の利用の様相に差異がないのであれば、社会的予測に見られる傾性主義バイアスは、情報の利用における差異とは異なる原因に帰属される現象と考えられる。本研究ではこの原因の検討として、情報の利用ではなく、その収集の段階に着目した。

社会的な判断には、情報の解釈や判断への反映に先行して、情報収集の段階が伴う（Anderson & Nichols, 2007）。しかし、全ての情報が偏りなく収集されるのではない。複数の情報を収集する場合、人は事前の期待に即する情報の価値を高く見積もり、その情報の収集に偏りを示す（Cantor & Mischel, 1977）。さらに、

この情報収集の偏りは対人判断にも影響する（De Bruin & Van Lange, 2000）。人は、行為者の行動が特性や態度を反映し、異なる状況を通じて一貫しているという、素朴な期待を持つ（Ross & Nisbett, 1991）。人物情報はこの期待に即するため、情報として価値が高いと言える。それゆえ社会的予測には、状況情報よりも人物情報に偏った情報収集が伴い、この偏りを反映して、傾性主義バイアスが生じると考えられる。

社会的認知の研究領域では、情報の収集段階に焦点を当てた研究の不足が指摘される（De Bruin & Van Lange, 2000）。しかし、意思決定や購買行動の研究では、特定の情報種への収集の偏りを捉える2つの指標が用いられている（Payne, 1976；Verplanken, 1993）。ひとつめは各情報種からの収集量であり、数の多さが特定の情報種への選択的収集を意味する。ふたつめは、特定の情報種に属する複数の情報を連続的に収集するのか、各情報種から交互に情報を収集するのかを表す連続性の程度である。連続性の高さは、特定の情報種への注意の偏りを意味し、こちらも選択的収集の程度を表わす指標となる。

本研究は、収集量と連続性の2つの指標で情報の収集段階を捉え、その変化と社会的予測との関連性を検討する。実験課題として、特定の他者の行動を予測するために、複数ずつ用意された人物情報と状況情報から、1つずつ収集するよう参加者に求めた。対象他者は二者択一の行動のいずれかを取る可能性を持ち、人物情報と状況情報とが各行動を排他的に支持する“人物対状況”の場面を設定した。また、情報収集の過程において行動の予測に生じる変遷を詳細に検討するために、情報を1つ収集するたびに、その時の暫定的な予測を行う課題を用いた。

社会的予測が人物情報への偏った情報収集を伴うのであれば、収集量および連続性の指標において人物情報が状況情報を上回るだろう。ま

た、情報収集後に行う社会的予測は、人物情報への収集の偏りを反映して、傾性主義バイアスを示すと考えられる。実験1ではこれらの可能性を検討するために、参加者が人物情報と状況情報を任意に収集する課題を用いた。

他方で、人物情報と状況情報の収集量および連続性を統制した場合には、その利用と予測への反映において、2種類の情報間に違いはないと考えられる。したがって、収集量や連続性の変化に伴う行動予測の変遷は、人物情報と状況情報が同じパターンを示すだろう。また、2種類の情報を等しく収集した後の社会的予測には、傾性主義バイアスが見られないと考えられる。実験2ではこれらの可能性を検討するために、2種類の情報の収集量と連続性を要因計画に従って統制し、そこで生じる予測に対する人物情報と状況情報の反映の様相を比較した。

## 実験1

### 方法

**実験参加者** 京都市内の大学生36名（男性13名、女性23名、平均年齢18.8歳、 $SD=1.4$ ）を用いた。実験は実験室内で個別に行い、1人あたり約20分を要した。

**予測課題** 実験室に入室した参加者に、学生による討論場面を映像で呈示した。この映像は大学生の男女7名ずつが議論している様子を録画したものである。音声を消し、視覚映像のみを呈示した。続いて、この討論では“福祉政策と教育政策”というテーマで議論していると、参加者に教示した。このテーマは、国や地方自治体に対して福祉政策と教育政策の推進が国民から望まれているが、財政上の理由から両政策を同時に推進することが困難なため、いずれかの政策を優先させる必要があり、行政はどちらを優先させるべきなのかを問うものであった。

このテーマの選定にあたり、福祉政策と教育

政策のいずれかを推進させることに対して、一般的な意見に偏りが無いことが望ましい。そこで、学部学生20名を対象にした予備実験にて、偏りの有無を確認した。議論テーマについて説明した後、このテーマについての態度を“福祉政策に賛成”(-2)から“教育政策に賛成”(+2)までの5段階で評価させた。その結果、いずれか一方の政策への偏った賛成の態度は認められなかった ( $M=.45$ ,  $t(19)=1.69$ , ns.)。

本実験では、このテーマに対応して、討論中の学生達は“福祉政策に賛成”と“教育政策に賛成”のいずれか一方を主張できると、参加者に教示した。その上で、討論学生の1人を対象として指定し、この対象他者が福祉政策と教育政策のどちらに賛成するのかを予測することが、実験の課題であると伝えた。対象他者は男女1名ずつとし、参加者を半数ずつ割り当てた。

**人物情報と状況情報** 課題の説明に続いて、予測の判断材料として2種類の情報種につき5情報ずつ設け、それらを任意に1つずつ収集するよう求めた。ひとつめは人物情報に該当する“対象他者が事前に回答した討論テーマに関するアンケート結果”とした。ふたつめは状況情報に該当する“他の討論学生が回答したアンケート結果や討論の開始時の様子”とした。この2種類の情報種の内容は、対象他者が取りうる二者択一の行動をそれぞれ排他的に示唆した。また、2種類の情報種が、“福祉に賛成”と“教育に賛成”のどちらの行動を示唆するのかについて、組み合わせのカウンターバランスを図った。すなわち、半数の参加者には、人物情報として、対象他者が福祉政策に賛成の態度を持つことを意味する5情報（“福祉政策の推進には賛成ですか、反対ですか”という質問に対して賛成と回答した、など）を用いた。また状況情報として、討論に参加していれば多くの人が教育政策に賛成と主張することを示唆する5情報（討論開始時の様子では、他の多くの学生のほ

ほぼ全員が教育政策に賛成していた、など）を用いた（Table 1 のセット1）。残り半数の参加者には、情報数は等しいまま、情報種と政策内容の組み合わせを逆にした人物情報および状況情報を用いた（セット2）。各情報種の5情報は、設定した特定の行動を

Table 1 実験1 および実験2 の課題で使した人物情報と状況情報

セット1	人物情報：対象人物の「福祉に賛成」という主張を示唆	
	“福祉政策の推進には賛成ですか？反対ですか？”という質問に対して彼（彼女）は“賛成”と回答した。	-1.20 (0.40)
	“福祉政策の推進の推進についてどのように思いますか？”という質問に対して彼（彼女）は“必要だ”と回答した。	-1.40 (0.92)
	“福祉政策の推進に賛同する署名活動があればどうしますか？”という質問に対して彼（彼女）は“署名する”と回答した。	-1.40 (0.49)
	“福祉政策の推進に賛同する政治集会があればどうしますか？”という質問に対して彼（彼女）は“参加する”と回答した。	-1.25 (0.54)
	“現在執られている福祉政策をどのように思いますか？”という質問に対して彼（彼女）は“不十分だと考えている”と回答した。	-1.35 (0.57)
	状況情報：対象人物の「教育に賛成」という主張を示唆	
	“教育政策の推進には賛成ですか？反対ですか？”という質問に対して他の9割以上の参加者が“賛成”と回答した。	1.20 (0.51)
	“教育政策の推進の推進についてどのように思いますか？”という質問に対して他の多くの人が“必要だ”と回答した。	1.05 (0.50)
	討論開始時の様子では、多くの人が“教育政策の推進に賛成”という立場で主張していた。	1.05 (0.97)
	討論を開始する前に、実験者から“教育政策の立場で主張してもらえれば終了後に謝礼を渡す”と全員に伝えた。	1.15 (0.48)
	討論を開始する前に、実験者から“教育政策の推進に賛成という意見を歓迎します”と全員に伝えた。	1.15 (0.57)
セット2	人物情報：対象人物の「教育に賛成」という主張を示唆	
	“教育政策の推進には賛成ですか？反対ですか？”という質問に対して彼（彼女）は“賛成”と回答した。	1.00 (0.55)
	“教育政策の推進の推進についてどのように思いますか？”という質問に対して彼（彼女）は“必要だ”と回答した。	1.50 (0.59)
	“教育政策の推進に賛同する署名活動があればどうしますか？”という質問に対して彼（彼女）は“署名する”と回答した。	1.20 (0.87)
	“教育政策の推進に賛同する政治集会があればどうしますか？”という質問に対して彼（彼女）は“参加する”と回答した。	1.20 (0.87)
	“現在執られている教育政策をどのように思いますか？”という質問に対して“不十分だと考えている彼（彼女）は”と回答した。	1.10 (0.44)
	状況情報：対象人物の「福祉に賛成」という主張を示唆	
	“福祉政策の推進には賛成ですか？反対ですか？”という質問に対して他の9割以上の参加者が“賛成”と回答した。	-1.20 (0.51)
	“福祉政策の推進の推進についてどのように思いますか？”という質問に対して他の多くの人が“必要だ”と回答した。	-1.30 (0.56)
	討論を開始する前に、実験者から“福祉政策の推進に賛成”の立場で主張するよう全員にお願いした。	-1.35 (0.57)
	討論を開始する前に、実験者から“福祉政策の立場で主張してもらえれば終了後に謝礼を渡す”と全員に伝えた。	-1.20 (0.51)
	討論を開始する前に、実験者から“福祉政策の推進に賛成という意見を歓迎します”と全員に伝えた。	-1.25 (0.54)

注）表内の数字は、予備実験にて各情報が対象人物の主張をどの程度示唆するものであるのかを評定するよう大学生20名に求めた結果の平均値と標準偏差（括弧内）。

同程度に示唆することが望ましい。この点を、先の20名の学部学生を対象とした予備実験で確認した。Table 1に示した情報のうち、各人物情報が意味する態度を持つ人物が、討論において福祉政策と教育政策のいずれに賛成するのかを評価させた。この評価は、“福祉政策に賛成”(-2)から“教育政策に賛成”( +2)までの5段階とした。また、状況情報は、その内容が示す討論状況において、一般的に多くの方が福祉政策と教育政策のいずれに賛成するのかを同尺度で評価させた。評価の平均値はTable 1の2列目に表示した。全ての情報の平均値は、中点を0とした一群比較の $t$ 検定において有意差を示した( $t_s > 4.7, p_s < .001$ )。つまり、各情報は、対象人物の特定の主張を示唆するものであった。また、同じ情報種に属する5情報が特定の主張を示唆する程度を比較するため、一要因分散分析を実施した。この分析は、Table 1のセット1の人物情報と状況情報、セット2の人物情報と状況情報で個別に実施した。全ての分析は、情報間の有意な違いを示さなかった( $F_s < 1.3$ )。この結果から、各情報種の5情報は、特定の主張を示唆する程度に差を持たないと判断した。

**手続き** 実験参加者に2種類の情報種から知りたいと思うものを選択させ、その情報種に属する5つの情報から1つを無作為に選び、実験者が口頭で呈示した。また、1回の情報収集のたびに、暫定的な予測として“対象他者が福祉に賛成と思う程度”と“教育に賛成と思う程度”のそれぞれに5点尺度で回答を求めた。情報の選択から予測までを1試行とし、対象他者の主張が予測できたと参加者が思うまで続けた。ただし最大で10試行となり、その旨は事前に教示した。情報収集を終えた参加者に、実験の目的と謝意を伝え、実験を終了した。

## 結果と考察

**収集量と連続性** 情報の収集過程を捉える指標として、2種類の情報の収集量と連続性の得点を参加者別に算出した。収集量の指標は人物情報と状況情報のそれぞれを各参加者が選択した回数であった。連続性の指標は、Payne(1976)の方法を応用して、情報種別に“連続選択回数/(収集量-1)”の式を用いて算出した。この指標は0から1までを取り得るもので、値が高いほどその情報種の連続性の高い収集を意味する。例えば“人物、人物、人物、状況、人物、人物、状況、状況”という順での情報の収集を考える。この場合、第1-2試行、第2-3試行、第5-6試行で人物情報の連続的収集が見られる。5つの人物情報を連続的に3回収集しているので、人物情報の連続性は、 $3/(5-1)=0.75$ となる。また状況情報の連続性は、 $1/(3-1)=0.50$ となる。状況情報の収集量が0であった13名の参加者については、人物情報の連続性を1、状況情報の連続性を0とした。

**情報収集の偏りと傾性主義バイアス** 人物情報への収集の偏りを検討した。まず、人物情報と状況情報の収集量および連続性を比較した。その結果、人物情報の収集量( $M=3.0$ )が状況情報の収集量( $M=1.4$ )よりも有意に多かった( $t(35)=5.6, p<.001$ )。同様に、人物情報の連続性( $M=.69$ )が状況情報の連続性( $M=.21$ )よりも有意に高かった( $t(35)=5.0, p<.001$ )。

また、人物情報は36名の全参加者が1つ以上収集したのに対して、状況情報を1つ以上収集した参加者は23名にとどまった。この人数比の比較としてマクニマー検定を実施した。その結果、状況情報と比較して人物情報を収集した参加者の比率が有意に高かった( $z=3.3, p<.01$ )。いずれの結果も、人物情報への選択的な収集の偏りを示すものであった。加えて、情報収集の第1試行で人物情報と状況情報のいずれを収集したのかを検討した。第1試行で人物情報を収

集した参加者は30名であったが、状況情報を収集したのは6名にとどまり、2項検定により有意な偏りが認められた ( $p<.001$ )。情報収集の初期の段階から、参加者が人物情報への収集の偏りを示していたと言える。

次に、情報収集の最終試行における予測を対象として、傾性主義バイアスの有無を検討した。実験では、人物情報および状況情報が“福祉に賛成”と“教育に賛成”のどちらを支持するかという組み合わせが参加者により異なった。そこで、収集した人物情報が支持する行動の暫定的予測を人物予測、状況情報が支持する行動の予測を状況予測とした。最終試行の両予測の得点を比較すると、人物予測 ( $M=3.8$ ) が状況予測 ( $M=2.9$ ) よりも有意に高く ( $t(35)=2.7$ ,  $p<.05$ )、人物情報が支持する行動予測への傾性主義バイアスが認められた。このバイアスは、収集量や連続性に見られた人物情報への収集の偏りを反映したものと考えられた。

**暫定的予測の変化** 人物情報と状況情報のもうひとつの比較として、それぞれの収集量や連続性が、暫定的予測の変化とどのような関連性を持つのかを検討した。人物予測と状況予測の評定は1試行ごとに行った。そこで、予測の変化傾向の指標として、収集試行数と人物予測お

よび状況予測との相関係数を参加者別に求め、フィッシャー変換を施した得点を算出した。ただし、いずれかの相関係数が1となり、フィッシャー変換が実施できない4名を分析の対象外とした。この2得点は正の値が高いほど情報収集に従って予測を強めたことを意味し、負の値が高いほど予測を弱めたことを意味する。人物予測と状況予測は、二者択一な行動の予測であったが、その変化傾向には関連性が認められなかった ( $r(30)=-.14$ , ns.)。そこで、収集量および連続性との相関分析は、変化傾向の2得点で個別に実施した。各指標の平均値と標準偏差、および指標間の相関行列をTable 2に示した。

相関分析は、人物情報の収集量と人物予測の変化傾向との正の相関 ( $r(30)=.49$ ,  $p<.01$ )、および状況情報の収集量と状況予測の変化傾向との正の相関 ( $r(30)=.51$ ,  $p<.01$ ) を示した。つまり、特定の情報種の収集量が増加するほど、その情報が支持する行動の予測が、収集試行に伴って強くなった。また、人物情報の連続性と状況予測の変化傾向との負の相関 ( $r(30)=-.55$ ,  $p<.01$ )、および状況情報の連続性と人物予測の変化傾向との負の相関 ( $r(30)=-.39$ ,  $p<.05$ ) が認められた。つまり、特定の情報種の収集の連続性が高いほど、その情報が支持し

Table 2 収集数、連続性、予測の変化傾向の平均と相関行列（実験1， $N=32$ ）

	<i>M</i>	<i>SD</i>	相関行列					
			1	2	3	4	5	6
1. 人物情報の収集量	3.1	1.3	—	.24	.28	.04	.49**	.16
2. 状況情報の収集量	1.6	1.6		—	-.50**	.54**	-.16	.51**
3. 人物情報の連続性	0.6	0.4			—	-.06	.26	-.55**
4. 状況情報の連続性	0.2	0.4				—	-.39*	.31
5. 人物予測の変化傾向	0.3	1.0					—	-.14
6. 状況予測の変化傾向	0.2	0.9						—

\*  $p<.05$ , \*\*  $p<.01$ .

ない行動の予測が弱められた。収集量や連続性と予測の変化傾向との他の有意な相関はなかった。

収集量や連続性の持つ社会的予測との関連性について、人物情報と状況情報とが同じパターンを示した。この結果は、情報の収集段階における社会的予測の変化を捉えた場合に、人物情報と状況情報が、予測への反映の様相において明確な違いを持たないことを示唆している。しかし、人物情報と状況情報の収集量および連続性は、その平均や分散が異なり、また相互に相関が見られる（人物情報の連続性と状況情報の収集量、など）。したがって、収集量および連続性の独立した効果を検討しておらず、この結果からは、両情報の同異を評価できない。

そこで実験2では、人物情報と状況情報の収集量および連続性を要因計画に従って操作し、社会的予測の変化傾向を条件間で比較することとした。この要因操作に伴って、情報収集の方法を、実験1のような参加者による能動的な収集ではなく、実験者から呈示される受動的な収集場面に変え、結果の再現性も併せて検討した。

## 実験2

### 方法

**実験参加者と予測課題** 実験1に参加していない京都市内の大学生84名（男性28名、女性56名、平均年齢21.7歳、 $SD=3.2$ ）を用いた。実験1と同じ予測課題を用いて、実験室内で個別に行った。実験参加者に討論場面の映像を呈示し、討論の参加学生の一人が“福祉に賛成”と“教育に賛成”のどちらの立場で主張するのかを予測するよう求めた。男女1名ずつの対象他者に参加者の半数ずつを割り当てた。

**収集量と連続性の操作** 実験で使用する人物情報および状況情報の内容や、この情報種と二者択一的な行動の組み合わせのカウンターバラ

ンスは、実験1と同様であった（Table 1）。

実験1と異なるのは、これらの情報収集が参加者の任意のものではなく、収集量と連続性を独立に操作して予め決定した数および順序での呈示とした点であった。この2要因の操作は、人物情報だけを対象とする場合と状況情報だけを対象とする場合とで個別に実施した。まず、人物情報の操作において、収集量要因として人物情報を5つもしくは3つ呈示する条件を設定した。連続性要因は、呈示する人物情報のうちの3つを連続的に呈示する有り条件と、全ての情報を非連続的に呈示する無し条件とを設けた。この4条件では状況情報の収集量と連続性を一定にし、5つの状況情報を全て非連続的に呈示した。同様の手続きを状況情報の操作で実施し、状況情報の収集量と連続性を操作した全4条件において、人物情報の呈示方法を一定にした。また、全8条件の情報収集の試行数を統制するために、特定の行動を支持しない3つの中性情報を用いた（“討論には18歳から28歳までの人がいた”，“討論には男性と女性が7名ずついた”，“討論は約1時間行った”）。収集量の5個条件では3つの中性情報から1つを無作為に呈示し、3個条件では3つ全てを呈示することで、全条件の収集試行数を11回とした。

収集量と連続性の操作を満たす情報の呈示パターンは5個－有り条件で12、5個－無し条件で22、3個－有り条件で4、3個－無し条件で20パターンとなった（各条件での収集パターンの一例はFigure 1を参照）。いずれのパターンで情報を呈示するのかは無作為に決定した。また、3種類の情報の呈示時に、5つもしくは3つの情報のいずれを呈示するのも無作為に決定した。

最後に、人物情報の5個－無し条件と状況情報の5個－無し条件とは共通して、2種類の情報を5つずつ全て非連続的に呈示するというパターンになった。そこで参加者の割り当ての際



条件	情報収集試行										
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
人物情報条件											
収集量－5個：連続性－有り条件（計12パターン）											
状況 → 人物 → 状況 → 人物 → 人物 → 人物 → 状況 → 人物 → 状況 → 中性 → 状況											
収集量－5個：連続性－無し条件（計22パターン）											
状況 → 人物 → 状況 → 人物 → 状況 → 人物 → 状況 → 人物 → 中性 → 人物 → 状況											
収集量－3個：連続性－有り条件（計4パターン）											
状況 → 中性 → 状況 → 人物 → 人物 → 人物 → 状況 → 中性 → 状況 → 中性 → 状況											
収集量－3個：連続性－無し条件（計20パターン）											
状況 → 中性 → 状況 → 人物 → 状況 → 人物 → 中性 → 状況 → 中性 → 人物 → 状況											
状況情報条件											
収集量－5個：連続性－有り条件（計12パターン）											
人物 → 状況 → 人物 → 状況 → 状況 → 状況 → 人物 → 状況 → 人物 → 中性 → 人物											
収集量－5個：連続性－無し条件（計22パターン）											
人物 → 状況 → 人物 → 状況 → 人物 → 状況 → 人物 → 状況 → 中性 → 状況 → 人物											
収集量－3個：連続性－有り条件（計4パターン）											
人物 → 中性 → 人物 → 状況 → 状況 → 状況 → 人物 → 中性 → 人物 → 中性 → 人物											
収集量－3個：連続性－無し条件（計20パターン）											
人物 → 中性 → 人物 → 状況 → 人物 → 状況 → 中性 → 人物 → 中性 → 状況 → 人物											

**Figure 1** 実験2の全条件の情報呈示パターンの一例。“人物”は人物情報の収集試行を，“状況”は状況情報の収集試行を，“中性”は中性情報の収集試行を意味する。各条件内にある複数のパターンのいずれで呈示するのかは参加者別にランダムで決定した。

に、この2条件を同一に扱い、計7条件に12名の参加者を無作為に割り当てた。これらの手続きの結果、本実験は、操作する情報種（人物、状況）×収集量（5個、3個）×連続性（有り、無し）の3要因参加者間計画での実施となった。

**手続き** 課題の説明後，“対象他者のアンケート結果”（人物情報），“他の討論学生のアンケート結果や討論の様子”（状況情報），および“参加者の構成や討論の所要時間”（中性情報）とした3種類から、要因計画に従って決められた数および順序で1情報ずつ呈示した。情報収集の1試行ごとに暫定的予測の2項目に7段階評定で回答するよう求めた。11試行の情報収集を終えた参加者に実験の目的と謝意を伝え、実験を終了した。

## 結果と考察

**傾性主義バイアス** 実験参加者が示した暫定的予測を、実験1と同様の方法で人物予測と状況予測とした。その上で、実験2の行動予測に傾性主義バイアスが生じたのかどうかを検討した。収集量や連続性の要因が予測に及ぼす影響は次項で検討する。ここではこれらの要因の効果を考慮せず、最終試行における人物予測と状況予測の比較を行った。まず、全参加者84名を対象とした比較では、人物予測（ $M=4.7$ ）と状況予測（ $M=4.3$ ）に有意差が認められなかった（ $t(83)=1.2$ , ns.）。また、人物情報と状況情報が5つずつ、非連続的に呈示された5個－無し条件の12名の参加者を対象として、同様の分析を実施した。この比較においても人物予測（ $M=5.0$ ）と状況予測（ $M=4.3$ ）に有意差が認め

られなかった ( $t(11)=1.1$ , ns.)。したがって、人物情報と状況情報の収集の過程を統制した場合には、傾性主義バイアスが生じないことを示した。

**暫定的予測の変化** 収集量および連続性の要因が暫定的な予測の変化傾向に及ぼす影響を検討した。実験では、各情報種の5個-無し条件を同一の条件として参加者を割り当てた。そこで、人物情報の収集量および連続性の効果を検討する分析と、状況情報の同要因の効果を検討する分析とを個別に実施した。したがって、式1の回帰式に基づく重回帰分析は、各情報種の操作に該当する48名の11試行を対象とした。

$$y = t + at + ct + act \quad (1)$$

$t$  は1から11の情報収集試行であり、 $at$ は収集試行に伴う予測の変化が収集量要因によって異なるのかを検定する交互作用項とした。同様に、 $ct$ は収集試行と連続性要因との交互作用項、 $act$ は収集試行、収集量および連続性の交互作用項とした。交互作用項の作成において、 $a$ は収集量の5個条件を1、3個条件を0とし、 $c$ は連続性の有り条件を1、無し条件を0とするダミー変数を用いた。また、各情報種の分析において、人物予測と状況予測とがそれぞれ予測変数 ( $y$ ) となり、計4回の分析を実施した<sup>1)</sup>。

実験1と同様に、収集量の増加が試行に伴う行動予測の変化を正の方向に強めるのであれば、 $at$ 項が有意となり、さらに $t$ の単純傾斜は

5個条件で高く、3個条件で低くなると考えられた。同様に、連続性の高さが、試行に伴う行動予測の変化を負の方向に弱めるのであれば、 $ct$ 項が有意となり、さらに $t$ の単純傾斜は有り条件で低く、無し条件で高くなると考えられた。

まず、4回の全ての分析で、有意な決定係数が得られた ( $R^2s > .04$ ,  $Fs > 5.8$ ,  $ps < .001$ )。また $t$ 項は、状況情報の操作条件における人物予測を対象とした分析でのみ有意な係数を示さず ( $\beta = .08$ ,  $t = 1.9$ ,  $p = .06$ )、他の3つの分析で有意な係数を示した ( $\beta s > .15$ ,  $ts > 3.7$ ,  $ps < .001$ )。

人物情報の操作条件における人物予測の分析では、 $at$ 項が有意であった ( $\beta = .10$ ,  $t = 2.3$ ,  $p < .05$ )。 $t$ の単純傾斜は、収集量の5個条件の係数 ( $\beta = .25$ ) が、3個条件の係数 ( $\beta = .06$ ) より有意に高かった ( $t = 6.7$ ,  $p < .001$ )。この分析結果を示したFigure 2のaおよびbに見られるように、5個条件での人物予測は収集試行に伴って増加する傾向にあったが、3個条件での人物予測は、収集した人物情報が反映されず、収集試行に伴った変化を示さなかった。

状況予測の分析では、 $ct$ 項が有意な係数を示した ( $\beta = -.23$ ,  $t = 5.7$ ,  $p < .001$ )。 $t$ の単純傾斜は、連続性の有り条件の係数 ( $\beta = -.02$ ) が、無し条件の係数 ( $\beta = .45$ ) より有意に低かった ( $t = 19.1$ ,  $p < .001$ )。Figure 2のcおよびdにおいて、収集試行に伴う状況予測の正方向への変化は、無し条件でのみ見られ、有り条件では認められなかった。つまり、人物情報を連続的に収集した参加者は、同時に収集した5つの状況情報を予測に反映させず、状況予測を強めなかった。

次に、状況情報の操作条件における人物予測の分析では、 $ct$ 項が有意な係数を示した ( $\beta = -.25$ ,  $t = -5.9$ ,  $p < .001$ )。 $t$ の単純傾斜は、連続性の有り条件の係数 ( $\beta = -.17$ ) が、無し条件の係数 ( $\beta = .33$ ) より有意に低かった ( $t = 19.3$ ,  $p < .001$ )。Figure 2のeおよびfにおいて、収集試行に伴う人物予測の正方向への変化は、無

1) この回帰式は、人物予測と状況予測の線形変化を仮定している。この分析に先立ち、予測の変化の線形性と非線形性について、 $y = p + t + t^2 + p(t + t^2)$ の回帰式に基づく重回帰分析を用いて検討した。 $y$ は2つの予測得点、 $p$ は無作為に割り当てた参加者番号を表した。 $t$ は1から11の収集試行であり、 $t$ 項で線形変化を、 $t^2$ で非線形変化を検定した。 $p(t + t^2)$ はこれらの変化傾向の個人差を検定する項であった。2つの予測得点の分析で、 $t$ 項の係数のみが有意であった (人物予測で $\beta = .08$ ,  $t = 2.4$ ,  $p < .05$ ; 状況予測で $\beta = .15$ ,  $t = 4.6$ ,  $p < .001$ )。したがって、予測の変化傾向は線形変化であると判断した。

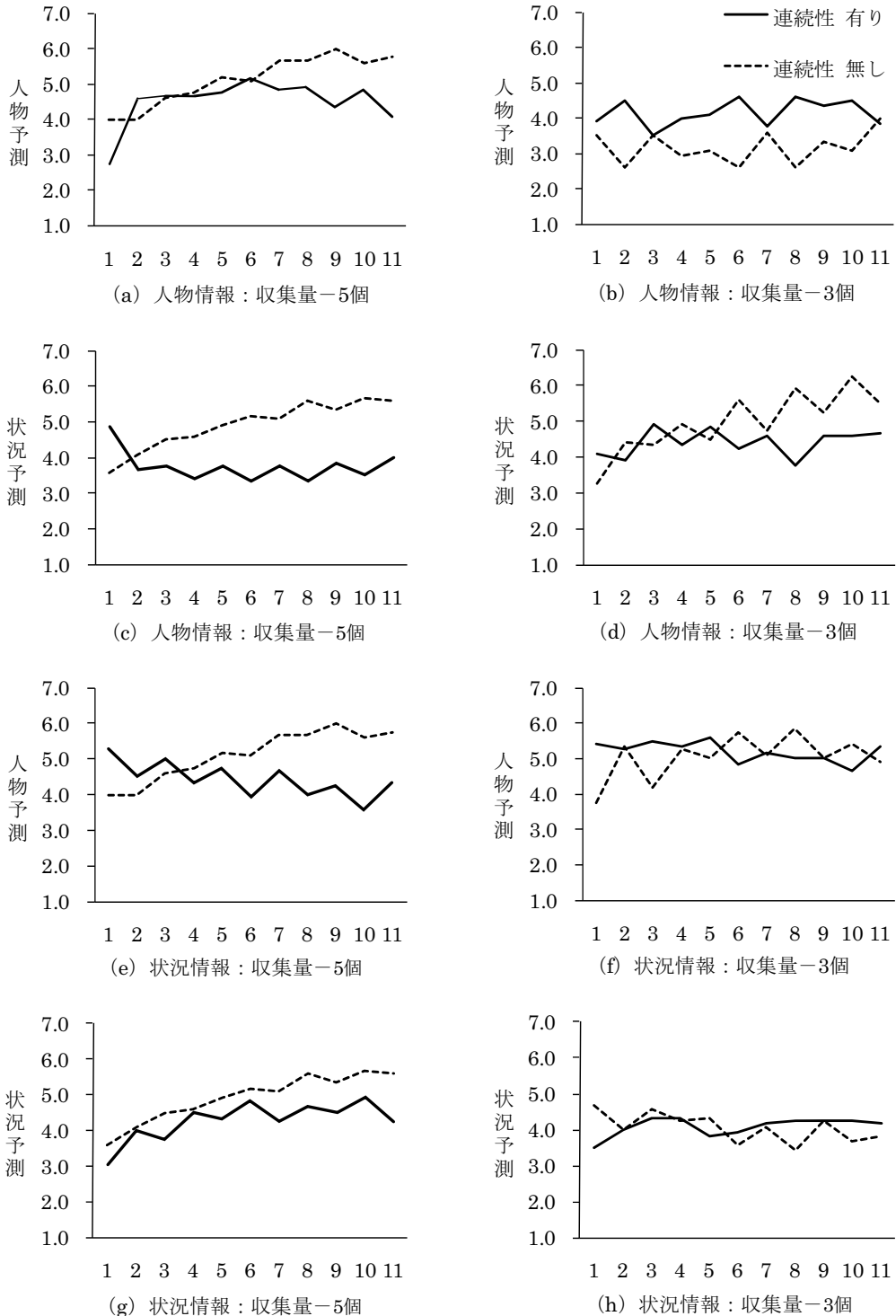


Figure 2 情報種、収集量、連続性の違いによる、人物予測と状況予測の変化（実験2）。横軸は情報収集試行数、実線は連続性の有り条件、破線は無し条件での変化を意味する。

し条件でのみ見られ、有り条件では認められなかった。つまり、状況情報を連続的に収集した参加者は、同時に収集した5つの人物情報を予測に反映させず、人物予測を強めなかった。

状況予測の分析では、at項が有意であった( $\beta = .20, t = 4.7, p < .001$ )。tの単純傾斜は、収集量の5個条件の係数( $\beta = .35$ )が、3個条件の係数( $\beta = -.04$ )より有意に高かった( $t = 15.8, p < .001$ )。Figure 2のgおよびhに見られるように、5個条での状況予測は収集試行に伴って増加する傾向にあったが、3個条件での状況予測は、収集した状況情報が反映されず、収集試行に伴った変化を示さなかった<sup>2)</sup>。

情報の種類にかかわらず、収集量が多い場合で、その情報が支持する行動予測が収集試行を通して強められるよう変化した。また、一方の種類の情報を連続的に収集した場面において、他方の種類の情報が予測に反映されなくなった。実験2では、2種類の情報の収集量および連続性の変化を等しく操作し、また受動的に情報を呈示される課題を用いた。この場面において実験1と同様の結果が得られ、収集量や連続性と予測の変化傾向との関連性について、人物情報と状況情報とが同じパターンを示した。

### 総合考察

本研究の目的のひとつは、社会的予測におけ

2) 状況情報の操作における人物予測の分析では、act項が有意であった( $\beta = -.09, t = -2.2, p < .05$ )。この交互作用は、連続性有り条件におけるt項が、収集量の5個条件で有意な負の係数を示したが、3個条件では有意ではなかったために生じた(それぞれ、 $\beta = -.23, t = -2.8, p < .001$ ;  $\beta = -.11, t = -1.4, ns$ )。また、状況情報の操作における状況予測でも、act項が有意であった( $\beta = -.12, t = -2.7, p < .01$ )。この交互作用は、収集量の5個条件におけるtの係数が、連続性の有り条件で相対的に弱く、無し条件で強かったために生じた(それぞれ、 $\beta = .26, t = 3.1, p < .001$ ;  $\beta = .45, t = 5.5, p < .001$ ; 係数の差:  $t = 5.5, p < .001$ )。これらの交互作用は、本文に記した解釈に反する結果ではないため、脚注での記載にとどめた。

る情報の収集段階に焦点を当て、状況情報よりも人物情報への選択的な収集の偏りが生じる可能性、およびこの偏りと行動予測における傾性主義バイアスとの関連を検討することであった。

まず、特定の情報種からの収集の様相を収集量および連続性という2つの指標で捉えた実験1において、状況情報よりも人物情報を多く、また連続的に収集する選択的な偏りが見られた。この偏りは、他者の行動予測において、人物情報の情動的価値が状況情報よりも高いために生じたと考えられる(Ross & Nisbett, 1991)。

また実験1では、人物情報への偏った収集の後の行動予測において、人物情報が支持する行動の見込みが、状況情報の支持する行動よりも高いと予測される、傾性主義バイアスが示された。しかし、2種類の情報の収集量および連続性を統制した実験2では、このバイアスが認められなかった。したがって、社会的予測の傾性主義バイアスは、主観的な情報としての価値を高く見積もられた人物情報への偏った収集を反映して生じると考えられる。

もうひとつの研究目的は、情報の収集段階において、収集された人物情報と状況情報の予測への反映の様相に違いが存在するのかを検討することであった。実験1では、2種類の情報の収集量および連続性と、それらの情報が支持する行動予測の変化傾向との関連性を検討した。また実験2では、直接操作した収集量および連続性が予測の変化傾向に及ぼす影響について、人物情報と状況情報とで異なるのかを比較した。どちらの実験においても、情報の種類に関わらず、収集量の増加はその情報が支持する行動予測を強め、連続性の高さは支持しない行動予測を弱めるよう働いた。この結果は、情報収集段階における予測の変化傾向を、収集量および連続性の観点から捉えた限りにおいては、人物情報と状況情報とが、予測への反映の様相に

差異を持たないことを示している。

その一方で、収集量と連続性が予測に異なる関連を示したことについて、その理由が明らかになっていない。収集量の増加は、特定の行動を支持する根拠の豊富さを意味する。多くの根拠が支持する行動の見込みを高く予測することは、理解しやすい。他方で連続性の高さは、二者択一的な行動の一方のみを支持する情報がまとまって獲得されることを意味する。そこでは、支持される行動の予測に強い確信が生じたのかもしれない。その結果、支持されない行動の見込みを低く予測した可能性が考えられる。この可能性の検討が今後の課題として挙げられる。

本研究の結果の意義を考察する前に、本研究で用いた課題や手続きの特徴を、先行研究と対比して整理する。最も大きな特徴は、2種類の情報の提示方法を同等に扱った点である。先行研究の場合、例えばNewman (1996) は、他者の人物情報（過去の行動）を事前に2個提示した。状況情報は1個のみ提示され、その提示時期は他者の行動予測を行う段階であった。この方法では人物情報と状況情報が数および提示順序において同等に扱われていない。傾性主義バイアスの検討として2種類の情報を比較するには不適切な手続きだろう。

もうひとつの特徴として、人物予測と状況予測を個別の指標で捉えた点が挙げられる。先行研究では、“人物 対 状況”という枠組みの中で、行動予測が単一の指標で測定されてきた。この指標は、例えば正方向への値の変化が人物情報への依存を意味し、負方向への変化が状況情報への依存を意味する (Newman, 1996)。単一の指標の変化が、2種類の情報のいずれかへの依存を直接的に意味するため、傾性主義バイアスの記述方法として簡便と言える。しかし、相対的な依存を表しているに過ぎず、人物情報および状況情報と社会的予測との関係は個々に検討されていない。社会的な判断において、複数の

情報が支持する複数の選択肢を、人は個々に検討する (Kruglanski, 1990)。社会的予測においても、人物情報の支持する行動と状況情報が支持する行動が、選択肢として個別に見込みを評価され、予測されるだろう。したがって、社会的予測において、2種類の情報の反映の様相を捉えるためには、選択肢となる複数の行動予測の変化が個別に測定されるべきであり、本研究はこの必要性に対応している。

手続きが持つこれらの特徴を踏まえて、本研究結果の示唆を考察する。単一の予測指標を用いて2種類の情報への相対的な依存を捉えた先行研究は、人物情報への過剰な依存を指摘してきた。また本研究の実験1では、状況情報よりも人物情報に対する相対的な収集の偏りがあり、この偏りが予測にも反映された。行動予測に傾性主義バイアスが生じるという点では、先行研究と本研究は一致している。

しかし、この相対的な収集の偏りが、人物情報と状況情報の利用における役割の固有性を意味するわけではない。収集過程の様相と予測との関連という観点から見た場合、両情報に見られる共通のパターンは、先行研究が主張する“人物情報＝係留”および“状況情報＝調整”という情報の役割の固有性と一致しない。予測の変化の方向という点では、獲得した情報が支持する行動予測を強める変化は係留に対応する。また、獲得した情報が支持しない行動予測を弱める変化は調整に対応するだろう。本研究結果は、人物情報と状況情報が共に、係留および調整の役割を担い得ることを示唆している。

また、実験1と実験2の情報の提示方法から、人物情報と状況情報の同異について示唆が得られる。実験1では参加者が能動的に情報を収集したが、実験2では受動的な情報提示を行った。情報の獲得が能動的か受動的かという違いは、参加者の課題遂行への動機付けに影響する (Dardenne, Yzerbyt & Gregorie, 2000)。

能動的な課題では、主観的な価値の高さに従って情報を獲得できるため、参加者の課題への統制感が高く、動機付けが強い。受動的な課題では、主観的な価値にかかわらず情報が呈示されるため、参加者の統制感が低く、動機付けが弱い。

人物情報と比較して、状況情報の利用は強い動機付けを要する点で、性質の違いが指摘されてきた (Poon & Koehler, 2006 ; Trope, 1986)。しかし本研究では、能動的な情報収集(実験1)や受動的な情報呈示(実験2)にかかわらず、状況情報が人物情報と同様に予測に反映された。この点から、収集過程の様相と予測との関連を見た場合には、2種類の情報には利用に要する動機づけの強さにも差異が無い可能性がある。

これらの示唆は、人物情報と状況情報の役割を再検討し、そこに機能的な違いがないことを主張した先行研究 (Ham & Vonk, 2003 ; Krull, 1993 ; Reeder et al., 2002) に合致している。それと同時に、社会的予測という、こうした諸研究とは異なる対人認知領域においても、両情報の性質や役割について、その同異を再検討する必要があることを示している。

## 引用文献

- Anderson, M. H., & Nichols, M. L. (2007) Information gathering and changes in threat and opportunity perception. *Journal of Management Studies*, 44, 367-387.
- Cantor, N., & Mischel, W. (1977) Traits as prototypes: Effects on recognition memory. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 38-48.
- Dardenne, B., Yzerbyt, V. & Gregorie, C. (2000) Active search for information: The effects of subjectively experienced control on stereotyping. In H. Bless & J. P. Forgas (Eds.) *The Message Within: The Role of Subjective Experience in Social Cognition and Behavior*. UK: Psychology Press.
- De Bruin, E. N. M., & Van Lange, P. A. M. (2000) What people look for in others: Influences of the perceiver and perceived on information selection. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 206-219.
- Dunning, D., Griffin, D. W., Milojkovic, J. D., & Ross, L. (1990) The overconfidence effect in social prediction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 568-581.
- Ham, J., & Vonk, R. (2003) Smart and easy: Co-occurring activation of spontaneous trait inferences and spontaneous situational inferences. *Journal of Experimental Social Psychology*, 39, 434-447.
- Kruglanski, A. W. (1990) Lay epistemic theory in social-cognitive psychology. *Psychological Inquiry*, 1, 181-197.
- Krull, D. S. (1993) Does the grist change the mill? The effect of the perceiver's inferential goal on the process of social inference. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 19, 340-348.
- McAdams, D. P. (1994) A psychology of the stranger. *Psychology Inquiry*, 5, 145-148.
- Newman, L. S. (1996) Trait impressions as heuristics for predicting future behavior. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 4, 395-411.
- Payne, J. W. (1976) Task complexity and contingent processing in human decision making: An information search and protocol analysis. *Organizational Behavior and Human Performance*, 16, 366-387.
- Poon, C. S. K., & Koehler, D. J. (2006) Lay personality knowledge and dispositionist thinking: A knowledge-activation framework. *Journal of Experimental Social Psychology*, 42, 177-191.
- Reeder G. D., Kumar S., Hesson-McInnis M. S., & Trafimow D. (2002) Inferences about the morality of an aggressor: The role of perceived motive. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 789-803.
- Ross, L., & Nisbett, R. E. (1991) *The Person and the Situation: Perspectives of Social Psychology*. Philadelphia: Temple University Press.
- Trope, Y. (1986) Identification and inferential processes in dispositional attribution. *Psychological Review*, 93, 239-257.

Verplanken, B. (1993) Need for cognition and external information search: responses to time pressure during decision-making. *Journal of Research in Personality*, 27, 238-252.

Winter, L., & Uleman, S. (1984) When are social

judgments made? Evidence for the spontaneousness of trait inference. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 237-252.

(2010. 2. 26 受稿) (2010. 5. 12 受理)